

唐詩に見られる屈原と賈誼の典故の相違：
後世に伝えられる人物像

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 許山, 秀樹 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00024905 |

唐詩に見られる屈原と賈誼の典故の相違 —後世に伝えられる人物像—

The Difference of the Allusions of Qu Yuan and Jia Yi in Verses Written in Tang Period of China

許山秀樹
Hideki NOMIYAMA
静岡大学情報学部

論文概要：本稿は、二人の文人屈原と賈誼が唐詩のなかでどのように見られているかを調査したものである。唐詩の中では、屈原は、賈誼と比較して典故数は多いが作品数はそれほど多くない。また、自身の事跡だけでなく、その文学作品に関わる典故が多い。一方で、賈誼は、典故数は少ないが作品数は比較的多い。また事跡に関わる典故が中心である。その相違が、詩跡の形成にも影響を与えている。

キーワード：屈原、賈誼、典故、唐詩、詩跡

Abstract: In this paper, I surveyed how the two literary persons are depicted in verses written in Tang Period. Qu Yuan, compared with Jia Yi, the number of allusions is larger, but the number of literary works is not so large. There are many allusions related to his literary works.

On the other hand, Jia Yi has relatively few allusions, but the number of literary works is comparatively large. And, almost all allusions are related to his life. These differences also affect the formation of poetic spots.

Keywords: Qu Yuan, Jia Yi, allusion, Tang verses, poetic spots

1 はじめに

筆者は中国の詩跡^(注1)に関して、論考を公刊してきた。とりわけ、中国の南方の詩跡を主たるテーマとしており、この地域に左遷された屈原に関連する詩跡はそのなかでも重要なものである。^(注2)そして屈原と似た経歴を持つ賈誼も注目すべき文人の一人である。^(注3)『史記』(巻八四)に「屈原賈生列伝」が書かれて以降、この二者は誰もが想起する組み合わせとなった。また、賈誼が江南に流されたとき、屈原を弔う作品「弔屈原賦」を書いたことでも、二人の結びつきは印象深い。^(注4)この二人の結びつきの強さが後世の人々に与えたものとして聯想され

る作品に、たとえば、齊己の「瀟湘」を挙げられよう。いま、頸聯を引く。

| | |
|---------|-------------------------------------|
| 遷來賈誼愁無限 | 遷り來たる賈誼 愁い 限り無く |
| 謫過靈均恨不堪 | 謫せられ過ぎる靈均 恨み 堪えず ^(注5) |

後世の人々にとって、二人の間には、こういった共通するイメージが形成されていったと思われる。

では賈誼は、屈原の単なるコピーであったのだろうか。それとも、賈誼は、屈原に類似する

存在という点ではなく、何か別の事情で後世に伝えられる存在であったのだろうか。この点は、ほとんど注意されないままになっているように思われる。^(注6)

屈原に類似する経歴を持つと言われる賈誼は、その伝記について知られることはそれほど多くない。詳しい伝記の一つに『漢書』「賈誼伝」(巻四八)があるが、賈誼自身の作品の引用が多く、事跡について述べられた部分は多くない。王洲明・徐超校注『賈誼集校注』(人民文学出版社、1996年)の「附録」に収められた賈誼伝は作品の引用を省略しているため、わずか三頁に過ぎない。また、人口に膾炙する文学作品は屈原ほどには存在しないと言ってよい。

屈原と賈誼は「屈賈」と併称される存在でありながら、知名度は屈原のほうが高く、後世に対する二人の影響度は似ているとはいえない。その相違をどう説明すればいいのであろうか。本稿の目的はそこにある。

本稿では、屈原と賈誼の人物像がどのように形成されていったかを調査し、後世の文人から二人がどのように見られてきたかを明らかにする。その際、調査範囲をひとまず唐詩に限定する。また、詩人像形成検証の手がかりとして、「典故」を用いることにする。典故とは、以下のよう

文学作品が表現の拠り所として踏まえる、故事あるいは先行する文学作品のこと。「用典」「用事」とは、文学作品の制作において典故を用いることを言う。^(注7)

考察の手がかりとして典故を用いる理由は、屈原と賈誼の人物像や文学が典故化によってどのような典型となり、表現の拠り所として後世に伝えられていったかを知りうると思われるからである。

本稿では、典故の使われ方を知る手がかりとして『全唐詩典故辞典』(修訂本、范之麟・呉庚舜主編、湖北辞書出版社、2001年)を用いる。

該書は、唐詩に見られる典故を7393項目立項し、解説を施したあとに、当該典故を含む唐詩の用例を列挙しており、本研究にとって、適切と思われるからである。該書の特色の一つに、列挙する用例数の多さが挙げられる。『全唐詩』の作品の中から、該当する作品を可能な限り掲載したと思われ、上・下二冊、全2084頁の大著となっている。

本稿では、各典故の使用状況を調査し、それぞれの典故がどのように用いられているか、そして、屈原と賈誼とではどのように異なっているか、を明らかにしたい。

もちろん、この『全唐詩典故辞典』を用いることに問題がないわけではない。何を典故とするかについては明確な基準があるわけではないことが理由の一つである。この『全唐詩典故辞典』に典故の偏りや漏れが存在する可能性もなくはない。

もう一点、指摘されうる問題点がある。それは、立項が必ずしも適切ではない、という点である。たとえば、「屈原」という項目があって、そこには「屈大夫」と「屈平」も含まれているが、「三閭」が別に立項されており、項目の立て方として問題があろう。一つにまとめても問題は生じないはずである。また、「投湘」は「沈湘」と「投汨」も含むとされているが、「沈湘」も別に立項されており、不適切であろう。

また、この『全唐詩典故辞典』に挙げられた用例に過不足がないという保証はないため、用例の多寡を論じることにはいささか不適切が生じるかもしれない。

したがって、本稿で項目数や用例数に依拠した議論を行なう際には、「『全唐詩典故辞典』に見られる限り」という留保がどうしても必要であろう。

しかし、この辞典が収めた項目数7393は十分に大きく、たとえ遺漏があったとしても、ごく少数にとどまるであろう。また、一つの典故だけでなく、複数の典故を用いて検証するので、

用例の過不足が一部にあっても、考察に大きな影響を与えることはないだろう。

ある程度の留保は必要であるが、『全唐詩典故辞典』を活用することによって、後世の文人らが抱いた屈原と賈誼の人物像の概略は、十分知りうると思われる。

2 屈原と賈誼の典故の概要

屈原は著名な「愛国詩人」として名高い故に、その詩句や事跡が典故となった事例は数多い。『全唐詩典故辞典』に引用された用例が10以上のものを別に用例数順に並べ、9例以下の典故はそれぞれ用例数毎に並べると、以下のようになる。カッコ内は主要な意味であり、その後の数字は、『全唐詩典故辞典』に掲載された用例数である。

【用例が10以上の典故】

滄浪（隠栖する）43例
 濯纓（超俗）34例
 羲和（皇帝が出かける）24例
 荷衣（神仙の服装）23例
 獨醒（汚れになじめない）13例
 屈原（屈原）13例
 南浦（送別）12例
 薜蘿衣（隠者の服）11例
 招魂（友人を思う）10例
 兔蟾（月）10例

【用例が9の典故】 宋玉（失意の文士）

【用例が8の典故】 瑤華（惜別の言葉）

【用例が7の典故】 馮夷（水の仙）／ 汨羅（忠臣が冤罪で死ぬ）／ 漁父（隠者）

【用例が6の典故】 誅茅（居室の造営）／ 湘靈鼓瑟（悲しみ）

【用例が5の典故】 三閭（屈原）／ 陽侯（舟を浮かべる）／ 燭龍（周囲を照らす）

【用例が4の典故】 巫咸（神巫）／ 投湘（屈原の死）／ 懷沙（屈原の死）／ 沈楚臣（屈原の死）／ 屈宋（屈原と宋玉）／ 顧兔（月

を詠じる）／ 鶻鳩鳴（美しい季節が過ぎていく）

【用例が3の典故】 天狼（反乱を起こす勢力）／ 叫閭（賢者を求めて得られない）／ 羽人丘（仙人が住む所）／ 沈湘（屈原の死）／ 呵壁問天（憤りを発する）／ 屈賈（屈原と賈誼）／ 羿落九鳥（太陽や鳥を詠む）／ 懸圃（仙境）／ 閭闔（天界）／ 楚大夫（屈原）

【用例が2の典故】 八柱（天を支えるもの）／ 九關（天宮の門）／ 山鬼（女性の悲しげな思い）／ 飛簾（風神）／ 投湘賦（屈原の死を悼む）／ 靈均（屈原）／ 澤畔吟（貶謫）／ 鄭袖（懷王夫人）／ 振衣（清く高く）／ 逢漁父（左遷される）／ 流金（酷暑）／ 望舒（月）／ 韓衆騎白鹿（仙人）／ 葬魚（左遷者の感情）／ 湘水魂（屈原の魂）／ 鼓枻歌（隠者）／ 蒙汜（老境）／ 雷公（雷神）／ 瑤圃（仙境）／ 濯足（世俗から離れる）／ 鰲背庭（伝説上の仙山）

【用例が1の典故】 一概量（同じ基準で）／ 九逝魂（故郷を思う）／ 九畹（蘭を詠じる）／ 九歌（民歌体）／ 三珪（三卿）／ 女嬃（屈原の姉）／ 雲師（雲神）／ 無地與懷王（懷王が受けた計略）／ 不凝滯於物（感慨にふける）／ 比君子（賢者に比す）／ 貝闕龍堂（水神の宮殿）／ 龍山（雪）／ 生別離（別れを詠じる）／ 目成（男女が目で情を伝える）／ 傳芭（祭祀のときの歌舞を伝える）／ 衆客醉（多くの人は見間違う）／ 紉蘭佩（無実なのに左遷される）／ 杜蘅（遠く手紙を送る）／ 巫陽反魂（死んだ巫師の復活）／ 折麻（友人を思う）／ 棼鰲（蓬萊を背負った大亀が手を打って踊る）／ 吹竇（過度に警戒する）／ 懷王跡窮（懷王の死）／ 初服（退いて仕えず）／ 奇服（かわった服）／ 佩藍（自分の美德を養う）／ 采芝（遊仙）／ 空桑（琴瑟）／ 樹蕙辭（離騷）／ 咸池（日を詠じる）／ 思湘沅（貶謫）／ 香草為君子（香草を賢臣に喩える）／ 修門（貶謫にあった魂が帰るところ）／ 修門象棋（惹きつけるもの）／ 皇樹

(橘を詠む) / 鳩鳥媒 (政治上、阻害される) / 逐黄鵠 (高く上昇したい) / 脂韋 (おもねる) / 鋪啜糟醜 (周囲に合わせる) / 逢壘便吹 (警戒する) / 高冠 (高潔) / 椒藍妒忌 (他者の嫉妬) / 彭咸淪没 (忠臣) / 奠楚魂 (屈原と同じく貶謫) / 魂來楓葉青 (遊魂が江南に戻る) / 棟葉慰忠魂 (屈原) / 靳尚 (佞臣) / 獻歲 (元旦) / 楚臣傷江楓 (失意) / 楚些歌 (招魂) / 楚服 (荷衣) / 楚歌遺佩 (秋の思い) / 攝提 (寅年) / 歌牛下 (失意のうちにいる) / 熊飴食人魂 (陰悪な環境) / 憔悴湘濱 (失意のうちにさまよう) / 蹇修 (知遇を求める) / 蹇裳 (友人への思慕) / 靡蕪 (香草)

以上が、『全唐詩典故辞典』に収められた屈原に関する典故である。

同様に、賈誼にもその詩句や事跡にまつわる典故が存在する。『全唐詩典故辞典』に引用された用例が10以上のものを用例数順に並べ、9例以下の典故は『全唐詩典故辞典』の掲載毎に並べると、以下ようになる。カッコ内は主要な意味であり、その後の数字は、『全唐詩典故辞典』に掲載された用例数である。

【用例が10以上の典故】

賈誼 (賈誼の人生) 73 例
 長沙謫 (左遷される) 23 例
 鵬鳥賦 (貶謫に遇う) 23 例
 洛陽才子 (才子) 19 例
 宣室 (賢才を召見する) 17 例
 弔屈原 (左遷される) 14 例
 前席 (皇帝の寵愛を受ける) 10 例

【用例が9の典故】 賈生慟 (文士が世を歎く)

【用例が6の典故】 系頸 (軍功を立てる)

【用例が5の典故】 三休 (高台に登る)

【用例が4の典故】 賈生謫 (文士の貶謫)

【用例が3の典故】 五餌 (敵を倒す妙手) / 吳公守 (郡主を褒める) / 賈誼上書 (才能が

評価される)

【用例が2の典故】 過秦 (政治の才能) / 問鵠 (左遷や早世を歎く) / 投湘賦 (弔屈原と同じ) / 投鼠 (悪を除去しようとして避ける) / 叔敖陰德 (陰徳を積む) / 賈馬 (文才有り) / 賈生脆促 (文士の早世) / 賦長沙 (左遷される)

【用例が1の典故】 馮敬 (諫めて殺される) / 漢庭哭 (文士が世を歎く) / 召賈生 (登用される) / 墮履 (失ったものへの思い) / 絳灌讒陷 (権臣が賢者を阻む) / 秦敖 (束縛された立場) / 賈筆 (時世を歎く) / 積薪 (危険な状態にいる) / 梁王傳 (賈誼) / 傅好書王 (賈誼) / 愁單閼 (左遷を歎く) / 鞭笞 (武力)

以上のように見てみると、『全唐詩典故辞典』が引用する屈原に関する典故は117であり、賈誼の典故の34例よりも多く、後世の文人に対する屈原の大きさが感じられる。

だが、詳細に見ていくと、ある事実に気づかされる。『全唐詩典故辞典』に立項された典故項目の総数は屈原が117で賈誼が34である一方で、『全唐詩典故辞典』に引用された唐詩数は屈原が417首、賈誼が240首である、という点である。つまり、典故の項目数で言えば、屈原は賈誼の3倍以上となるものの、屈原関連の典故を含む作品は賈誼のそれと比較して2倍以下であるから、唐代詩人に対する賈誼の影響力は屈原と比較して必ずしも大きく劣っているとは言えないようである。違う視点から見ると、一つの典故項目に引用された唐詩の数の平均値では、賈誼は屈原を凌駕するのである。具体的に言えば、『全唐詩典故辞典』に載せられた屈原関連の項目は117、その項目に引かれた唐詩の総数は417であるから、一つの項目あたり、平均で3~4首の詩が引かれていることになる。

その一方で、『全唐詩典故辞典』に引かれた賈誼の典故項目は34であり、そこに引かれた唐詩の総数は240であるから、一項目あたりの

唐詩数は7～8首となり、屈原の2倍となる。平均して言えば、「各典故の吸引力」は屈原が低く、賈誼が高いと言えよう。この結果をどう考えればいいのであろうか。

次章では、ひとつひとつの典故を検証し、考えられる理由を明らかにしたい。

3 屈原の典故の検証

まず、屈原関連の典故のうち、引用唐詩数が10を超えるものを検証しよう。

屈原ゆかりの典故のうち、『全唐詩典故辞典』で最も用例が多いものは「滄浪」であり、43例の唐詩を引用する。この「滄浪」は『孟子』（離婁篇・上）に「有孺子歌曰、滄浪之水清兮可以濯我纓、滄浪之水濁兮可以濯我足。孔子曰、小子聽之、清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取之也」と述べられ、『楚辭』（漁父）においても「漁父莞爾而笑、鼓枻而去、乃歌曰、滄浪之水清兮可以濯吾纓、滄浪之水濁兮可以濯吾足。遂去不復與言」と書かれている部分に由来する。「滄浪歌」は楚の地に伝わる古い民謡であり、『楚辭』に引かれた箇所では、全体としては、世俗を離れ、帰隱を勧める内容となっている。その結果、「滄浪」といえば、「隱栖」を思い浮かべる典故となっている。

「滄浪」を典故として詠まれた唐詩を『全唐詩典故辞典』にしたがって見ていくと、他者に対して用いたものが13例、自分自身に用いた例が29例、その他が2例、と分類できる。

他者に対して用いたものとして、以下の錢起「送畢侍御謫居」がある。その冒頭六句を挙げる。

| | |
|---------|-------------------|
| 崇蘭香死玉簪折 | 崇蘭香死して玉簪折る |
| 志士吞聲甘徇節 | 志士 聲を吞みて節に徇ざるに甘んず |
| 忠藎不為明主知 | 忠藎くすも明主に知られず |
| 悲來莫向時人說 | 悲來たるも 時人に向って説く莫かれ |
| 滄浪之水見心清 | 滄浪の水 心の清きを |

見る

楚客辭天淚滿纓 楚客 天を辭して 涙纓に滿つ

……

ここで挙げられた「滄浪」は、その清らかさが謫居する畢侍御の心の比喩として使われている。^(注8)

一方、詩人が自分自身に対して用いる例もある。一例として、杜甫「惜別行、送向卿進奉端午御衣之上都」を挙げる。

……

向卿將命寸心赤 向卿 命を將いて寸心赤く

青山落日江潮白 青山 落日 江潮白し
卿到朝廷說老翁 卿 朝廷に到れば老翁を説け

漂零已是滄浪客 漂零 已に是れ 滄浪の客なりと

ここでは自分自身を「滄浪客」と表現し、中央官界に戻れず、南方の地で「漂零」する人間として描かれている。^(注9)

このように、「滄浪」は使い方によっては清らかな自然の中で自由に生きるという肯定的な意味もあり、また、中央官界に戻れず、地方で不遇のままくすぶって生きるという否定的な意味の二つがあり得た。どちらの意味でも用いることは可能であったわけである。にもかかわらず、他者に用いたものが13例、自分に用いた例が29例となっており、有意に偏りがある。これはどのように解釈したらよいのであろうか。

最も説明が容易な観点は、滄浪ゆかりの文人屈原がたどった結末であろう。屈原はもちろん、多くの文人にとって敬慕する先人であった。しかし、中央への復帰を願う者にとって、貶地で死んだとされる屈原を自分と重ねて表現されることは、少なからぬ抵抗が誰にもあったのではなかろうか。屈原を他者に対して用いた例が相

対的に少ない理由は、まずそこに求められよう。

一方で、屈原を自分自身に対して用いることは、逆にその「末路」を暗示する効果が生まれ、典故として屈原を用いることに因る「凄み」が増すことになる。江南に流されて、許されないまま死んだとされる屈原を典故として用いることは、先に挙げた杜甫詩のような、自分の不遇を訴えて救済を求める作品にこそふさわしいと言えよう。自分を詠じる際に典故として屈原をもちいることが相対的に多かったのは、そこに理由を求められよう。

次に「濯纓」（「纓濯」も含まれる）を見てみよう。別稿にすでに記したように^(註10)、屈原ゆかりの典故の代表例であり、かつ、詩の中で用いられる時には、伝統的解釈から逸脱した部分がある。この「濯纓」は、「滄浪」と同じく、『孟子』（離婁篇・上）に「有孺子歌曰、滄浪之水清兮可以濯我纓、滄浪之水濁兮可以濯我足。孔子曰、小子聽之、清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取之也」と述べられ、『楚辭』（漁父）においても「漁父莞爾而笑、鼓枻而去、乃歌曰、滄浪之水清兮可以濯吾纓、滄浪之水濁兮可以濯吾足。遂去不復與言」と書かれていることに基づく。伝統的解釈では「濯纓」は出仕するための行動とされているが、詩の中では、「濯足」と同じく、汚れた世俗から離れ、清らかな環境の中で自分の性情を十分に展開することに用いられている。『全唐詩典故辞典』には34例が引かれているが、自分に対して他人に対しても用いられ、自分に対して詠んだ例が25例、他者に対して詠んだ例が9例あり、傾向に差がある。前述の「滄浪」と同様の事情によるものだろう。また、その多くが、伝統的な解釈とは異なり、塵俗から離れ、清らかな心情を持って自然の中に生きることを含意している。伝統的解釈に基づいて、官界へ赴く意味として、とりわけ、中央官界へ赴く意味として用いられた例はほとんど見いだせない。例外として、李父の作品が挙げられよう。「餞唐州高使君赴任」詩には、「淮源之水清、

可以濯君纓。彼美稱才傑、親人佇政聲」（首聯・頷聯）のように詠われ、『全唐詩典故辞典』（下巻、2051頁）のコメントは「唐州為春秋時楚地。這裏取『楚辭』「漁父」歌「滄浪」、時若清明方可入仕之意、以切合高使君赴任」とする。この例が、出仕する人を詠じた少数の用例として認めうる。

「義和」も唐詩のなかでは典故として愛用された。『全唐詩典故辞典』によれば、24例を数える。この語は、「離騷」に出てくる表現である。そこには「吾令義和弭節兮、望崦嵫而勿迫」といい、王逸注によれば、「義和、日御也」とされる。つまり、太陽が乗る車の御者とみなされていた。太陽は時間、あるいは皇帝の象徴とされることもあるため、時の流れや皇帝の外出などを意味するようになった。この典故を用いた作品は、張説「舞馬詞 六首」（其二）、儲光羲「登秦嶺作、時陷賊歸國」、李白「長歌行」、杜甫「同諸公登慈恩寺塔」などがある。この典故については、屈原の生涯とは特に関わりがなく、具体的な事物を象徴するだけの機能のようである。

次に、「荷衣」（他に、「楚服・荷裳」も含まれる）を見る。この「荷衣」は『全唐詩典故辞典』に23例を数え、典故となった屈原関連の表現の中では、比較的多い。「荷衣」は「離騷」の「製芰荷以為衣兮、集芙蓉以為裳。不吾知其亦已兮、苟余情其信芳」や「九歌・少司命」の「荷衣兮蕙帶、儵而來兮忽而逝。夕宿兮帝郊、君誰須兮雲之際」に用いられている。「荷衣」とは「荷」（ハス）の葉で作った服であり、神人である少司命が着用し、屈原が退隱時に着たものである。ここから、のちには、「荷衣」を隱者や処士、神仙として詩文の中で用いられている。

唐詩の用例では、隱居・隱者などを指す語として用いられている。自分に対しても他人に対しても偏り無く用いられている。

『全唐詩典故辞典』を見る限り、この「荷衣」

を含む詩は、相手に対しての使用は10例以上を数えており、自分だけでなく他人に対してもはばかりなく用いることができたと思われる。それは、この「荷衣」が屈原だけに関わる詩語ではなく、神人の少司命が着用したものであり、この「荷衣」の使用が必ずしも屈原の人生のみを想起させ、その不幸な最期を印象づけることを意味しないからではないかと思われる。

次に「独醒」（「孤醒」も含まれる）を検証しよう。『全唐詩典故辞典』には併せて13例が収められている。

この「独醒」は『楚辞』「漁父」の中の屈原の発言「舉世皆濁我獨清、衆人皆醉我獨醒、是以見放」に見られる語である。自分一人だけが清潔であって汚れた俗世には合わなかったので放逐されたことをいう。後世でも、直臣が汚れた世界になじめないことを詠う。以下、『全唐詩典故辞典』に収められたコメントで検証しよう。

- ①這裏用「漁父」文意以切詠漁父。（李頎「漁父歌」）
- ②這裏化用「漁父」語意、自陳惜別的心情。（杜甫「醉歌行」）
- ③這裏以屈原比擬受誣的裴南部。（杜甫「贈裴南部聞袁判官自來欲有按問」）
- ④這裏以屈源自喻。（顧況「送韋秀才赴舉」）
- ⑤這裏用屈原「衆人皆醉我獨醒」語、以「獨醒者」自指、表明自己「離觴不醉」、同時暗喻自己因不同流合汚而遭貶。（柳宗元「離觴不醉至驛却寄相送諸公」）
- ⑥這裏以屈源自喻。（孟郊「退居」）
- ⑦這裏用屈原（靈均）因正直不妥協而被流放比擬元稹遭貶、意在稱美。（白居易「和思歸樂」）
- ⑧這裏用「漁父」語意、以切詠漁父。（杜牧「贈漁父」）
- ⑨這裏以「孤醒」贊李虞、暗含對他未遇於時的同情。（李群玉「自澧浦東遊江表途出巴丘投員外從公虞」）
- ⑩這裏說獨醒人未必不飲、從側面回護愛酒之癖。（曹鄴「對酒」）

⑪這裏以「獨醒人」比喻山上樹、表示對樹的贊美、亦含有借樹以表達自己情趣的意思。（于武陵「山上樹」）

⑫這裏以屈原襯托自己的遭遇。（錢珝「江行無題一百首」其二十）

⑬作者酬和李氏、用屈原遭貶遂遇漁父事襯托李氏的遭遇、謂李氏遇赦、情況有別於屈原。（皎然「奉酬李中丞洪湖州西亭即事見寄兼呈吳馮處士時中丞量移湖州長史」）

以上の13例の中で、この「独醒」がどのように用いられているかを確認すると、自分に対して用いた例が6例、相手に対して用いた例が4例を数える。数多くの文人が左遷された事例から考えると、この数は必ずしも多くはない。その理由のヒントは皎然の作品に求めるのではないか。つまり、皎然の作品では「樵子逗煙墅、漁翁宿沙汀。主人非楚客、莫謾譏獨醒」と述べ、李中丞が「独醒」ではあるけれども「楚客」ではないと表現している。つまり、世俗の汚れに染まらないという屈原の部分を李中丞は確かに持っているが、李中丞は量移されたので、許されずに貶地で死んだ屈原とはその最期が異なっている、と強調している。存命の人物に対してこの「独醒」の故事を用いるとき、そのような配慮は必要であったのだろう。左遷された人物を描くときに「独醒」は典故として一見ふさわしいように思えるが、屈原の生涯、特にその最期を考えると、「独醒」をそのまま使用することはためらわれたのではないだろうか。

「屈原」（他に、「屈大夫・屈平」も含まれる）という語自体も典故として唐詩では用いられる。しかし、『全唐詩典故辞典』（下巻、1148頁）に引かれた作品数は、13例を数えるのみである。今、『全唐詩典故辞典』に13例に附されたコメントを列挙する。

①這裏用屈原事、借以寄托對當朝直臣進諫遭貶的不平。（李白「古風」其五十一）

②這裏引屈原事作為寄托悲憤之一例。（李白「悲

歌行」)

- ③這裏以屈原被放逐比擬自己的遭遇。(李白「單父東樓秋夜送族弟沈之秦」)
- ④這裏用《漁父》中屈原與漁父對話事、以屈原獨醒被放逐的遭遇襯托自己的生活態度。(戴叔倫「同兗州張秀才過王侍御參謀宅賦十韻」)
- ⑤這裏以屈原喻指陳侍郎、表示邀請之意。(孟郊「羅氏花下奉招陳侍御」)
- ⑥這裏引屈原遭流故事、用來同嗜酒的劉伶相對比、借以抒發醒者苦志、醉者多歡的感慨。(白居易「效陶潛對詩十六首」其十三)
- ⑦作者因登岳陽樓而遣懷屈原。(張碧「秋日登岳陽樓晴望」)
- ⑧作者詠楚懷王入關、聯想到屈原忠諫不被採納、反遭貶逐。(杜牧「題武關」)
- ⑨這裏借「濤起屈原通」表現自己正泛舟楚地。(賈島「寄朱錫珪」)
- ⑩這裏巧妙地將岸樹「先秋」的原因理解為屈原愁恨未盡、借以抒發自己的感慨。(于武陵「夜泊湘江」)
- ⑪這裏舉屈平與孟昌圖相比、意在褒揚孟昌圖、亦在痛惜他的無罪而死。(裴澈「弔孟昌圖」)
- ⑫這裏以「屈平情」代指抒寫愁懷之作。(吳融「府試雨夜帝裏聞猿聲」)
- ⑬這裏引屈原諫君事為一例、寄托用世招患的感慨。(杜光庭「懷古今」)

以上のように見てみると、「屈原」という典故が必ずしも「多くの作品の中で用いられた」とは言い難い状況であることがわかる。南方に左遷された文人は多数いるわけであるから、その人々を屈原に比すことはあってもよいわけである。だが、屈原の知名度を考えれば、この13首という用例は多いとは言い難い。

その理由を暗示するのが、裴澈「弔孟昌圖」であろう。罪なく死んだ孟昌圖に擬えるには屈原はまさに適切であるけれども、この典故を生存している知友や自分に対して用いるこ

とは、その不幸な最期を暗示することになり、心理的な抵抗があったはずである。「屈原」という典故の用例がそれほど多くはない理由は、まず、この点に求められよう。

次に「南浦」という語を検証しよう。『全唐詩典故辞典』には12例を数える。この「南浦」は『楚辞』「九歌・河伯」の「子交手兮東行、送美人兮南浦。波滔滔兮來迎、魚鱗鱗兮勝予」に用いられている。美人を「南浦」で見送ったことから、「南浦」は送別の地を象徴する場所となった。『全唐詩典故辞典』(下巻、1200頁)には、「這裏用「南浦」点明送別」(杜甫「憑孟倉曹將書覓土妻舊莊」)のようにコメントされていることがほとんどである。

このように、「南浦」は送別の地の象徴として用いられており、詩の世界に美しい奥行をもたらししているが、特に屈原の人生とは大きく関わっていないようである。

次に、「薜蘿衣」(他に、「薜荔衣」も含まれる)を見ることにしよう。この語は『楚辞』「九歌・山鬼」に「若有人兮山之阿、被薜荔兮帶女羅。既含睇兮又宜笑、子慕予兮善窈窕」と詠われ、「薜蘿(つた・かずら)の衣服」の意味で用いられている。王逸の注には「被薜荔之衣以兔絲為帶」という。後世では、「被蘿衣・薜荔衣」の語は隠者の衣服を暗示するものとして用いられる。『全唐詩典故辞典』では11例の用例を挙げる。ここで用いられた「被蘿衣」などの語は、自分に対しても他人に対しても用いられており、特に忌避されているようには感じられない。

次に、屈原の人生と大きく関わっていると思われる典故を見よう。『楚辞』に「招魂」という作品があり、一説には宋玉が屈原を思って書いた作品とされ、また、一説には屈原が懷王を悼んで作った作品とされている。いずれにしても、故郷や知己を思い、落魄した心情を表現し

たものとされる。『全唐詩典故辞典』を見ると、「招魂」（他に、「楚辞招・魂招」が含まれる）という典故には10首の例が引かれている。そのうちの9首が杜甫の作品であり、残りの1首は李賀の作品である。この10首における「招魂」の意味は、『全唐詩典故辞典』ではそれぞれの用例に於いて、「渲染故郷之心」「表現思念亡友蜀州高使君的心情」「追述昔日逃難之状、并切出國門」「表現唯恐團聚無日的感傷」「表明擔心故郷難歸的愁思」「道出鄉思之痛」「抒寫漂泊之感」「表現自己返鄉的願望」「自嘆遠離在楚的友人」「表現自己迷亂的心情」とあり、故郷を離れて生じる心情や遠く離れた友人を思う気持ちを詠じている。特に、故郷を思う心情を詠じたものが7例と多く、遠く離れた友人らを詠じたものは2例である。したがって、この「招魂」は自分の中にわき起こる悲しみの情を詠んだものとみなしうる。屈原の人生と大きく関わる語であるけれども、唐詩の中では、この「招魂」の主体はあくまで詩の作者自身の心情である。

屈原関連の典故の最後に、「兔蟾」（他に、「金蟾・寒兔・寒蟾・秋蟾・化蟾・昇兔」が含まれる）を検討する。この語は、屈原の「天問」で使われている。その中で、以下のように描かれる。「夜光何徳、死則又育。厥利維何、而顧菟在腹」という。その王逸注には、以下のように言う。「言月中有菟、何所貪利、居月之腹而顧望乎。菟一作兔」。つまり、蟾蜍伝説と併せて、月には、兔と蟾蜍が住んでいると信じられていた。そのため、後に、この「兔蟾」という語は、月を詠じる際の典故となった。この語を典故として詩を詠じた詩人は『全唐詩典故辞典』によれば、杜甫「月」、令狐楚「八月十七日夜書懷」、韓愈「昼月」などである。この典故は屈原の人生と大きく関わった典故ではないようである。

以上の検証をまとめると、屈原の典故については以下のように言うことができるだろう。

屈原に関する典故のうち、『全唐詩』に見ら

れるものは、『全唐詩典故辞典』によれば117項目であり、賈誼と比較すると3倍以上となり、典故数の点では影響力の大きさがうかがえる。『全唐詩典故辞典』のなかで屈原の典故の用例として引用されたものは417首であり、かなりの数に上る。すでに示したように、一項目あたりの用例数が賈誼よりも相対的に少ない点は、数多くの作品が少数の典故に偏って詠われたのではなく、屈原に関わる多様な側面が多く作品の中でそれぞれに詠われたから、と言ってよいだろう。屈原の典故を検証した際に確認したように、屈原の人生と関わる典故ももちろんあるが、人生とは直接関わらず、屈原の文学のなかから生まれて典故となったものも少なくないという点も、見逃せないポイントの一つである。屈原は、その悲劇的な人生の側面のみならず、その文学作品によっても後世に影響を与え続けた人物と言えよう。

4 賈誼の典故の検証

ここで、『漢書』の記述に従い、賈誼の生涯の主要な出来事を確認しておこう。

洛陽出身で、十八歳で『詩』や『書』を誦読でき、文をつづることに優れ、河南の守呉公はその秀才ぶりを高く評価した。文帝も賈誼を評価し、博士とした。このとき、二十余歳であった。

最年少の博士となった賈誼は問われることに答え、太中大夫に昇進した。

賈誼は礼儀・法度に関して意見を述べた。天子は公卿にあげようとしたが、群臣は反対し、天子も疎んずるようになって長沙太傅となった。

賈誼は赴任の途中、湘水を渉る際、賦を作り、屈原を弔った。

賈誼が長沙太傅になって三年、フクロウが賈誼の宿舎に入り、部屋の隅に止まった。フクロウは不吉な鳥であり、自分は長生きできないと思ひ、賦を詠じて自分を慰めた。

一年余りして文帝は賈誼を召して話を聞き、その能力を評価して梁の懐王の太傅とした。

当時、天下は治まりかけたところであり、賈誼は上疏して建て直すことを述べた。

文帝が「代」を二つに分けたとき、賈誼は上疏した。

淮南の厲王の四子を列侯にしたとき、上疏した。

梁王勝が馬から落ちて死に、自分が傅の役目を果たせなかったので歎き、一年あまり経って賈誼も死んだ。三十三歳であった。

以上が『漢書』卷四八「賈誼伝」に収められた賈誼の生涯の概略である。三十三歳の若さで死んだために、目立った事跡はそれほどない。また、残した作品の中に、特に名高い表現があるわけでもない。しかし、その名は後世に伝えられており、名高い文人の一人である。

では、賈誼ゆかりの典故はどのようなものになっているであろうか。『全唐詩典故辞典』を手がかりに見ていこう。

まず、賈誼に関する典故のうちで最も多い73例を数える典故は、「賈誼」（他に、「賈長沙・賈傅」が含まれる）という二字そのものである。作品中に「賈誼」が典故とされる場合には文脈によってさまざまな側面・解釈があり得るが、『全唐詩典故辞典』を参考にすると、概ね、以下のように分類が可能であろう。

- [1] 懐才不遇の側面を詩人自身に喩えた (27例)
- [2] 懐才不遇の側面を詩人自身ではなく、他者に喩えた (40例)
- [3] 優れた人の一例として例示 (6例)

以上の分類から、自分自身に対して用いた例が27例、他者に対して用いた例が40例、その他が6例あることがわかる。73例という数は、屈原の典故の中で最も多かった「滄浪」の

43例よりも遙かに多い。^(注11) この事実も併せて考えると、この「賈誼」は身近な存在であり、典故としてきわめて使いやすかったと言える。^(注12) そして、他者に対しても用いた例が過半数を超えるという事実から考えると、他人に対して用いても何ら支障がある典故ではなかったということがうかがえる。その理由は言うまでもなく、屈原とは異なり、賈誼は結局は許されて中央官界に復帰しているという点に求められよう。その根拠のヒントは次の李白の作品「送別得書字」に求めうるだろう。頸聯・尾聯を引く。

| | | |
|-------|-------------|-----------|
| 日落看歸鳥 | 日 落 ち | 歸 鳥 を 看 |
| 潭澄羨躍魚 | 潭 澄 み | 躍 魚 を 羨 む |
| 聖朝思賈誼 | 聖 朝 | 賈 誼 を 思 い |
| 應降紫泥書 | 應 に 降 す べ し | 紫 泥 の 書 |

引用部分の前半の情景は清澄な風景の中、意を得て自由に生きる鳥や魚を詠じる。典故の「賈誼」も含めれば、ここで詠まれた人物が本来の場所に落ち着くことを暗示していよう。「屈原」とは異なり、賈誼を用いた表現は、南方に左遷されていたと思われる友人が中央官界復帰を果たすことを示していよう。激励の意味も含み得たわけである。

二つ目の典故として、「長沙謫」を挙げられよう^(注13)。「長沙謫」の語は、『漢書』（卷四八）の「誼既以適居長沙、長沙卑濕、誼自傷悼、以為壽不得長、乃為賦以自廣」などによる^(注14)。

『全唐詩典故辞典』では23例を引く。賈誼はその才能を疎まれ、漢の文帝によって左遷されて長沙太傅となり、長沙に三年居住することになる。そのため、「長沙謫」は左遷されることを述べる典故となった。『全唐詩典故辞典』に引かれた用例と、そこに附されたコメントを調べると、23例の用例のうち、自分に対して用いたと思われる例が7例で、他人に対して用い

たと思われる例が16例であり、他者に対して用いた作例が自分に対して用いたものの約二倍を数える。具体的には以下のようになっている。

張説「岳州別姚司馬紹之制許歸侍」
 和玉悲無已 和玉 悲み 已む無く
 長沙宦不成 長沙 宦成らず
 天從扇枕願 天は扇枕の願に従い
 人遂倚門情 人は倚門の情を遂ぐ
 ……

そこに附された『全唐詩典故辞典』（上巻、299頁）のコメントには、「姚司馬自京城貶岳州、今又去職還郷、故而説「長沙宦不成」とあり、姚司馬に対して用いられたことがわかる。

ほかにも、以下の詩がある。

張子容「永嘉即事、寄贛縣袁少府瓘」
 ……
 海氣朝成雨 海氣 朝に雨と成り
 江天晚作霞 江天 晩に霞と作る
 題書報賈誼 書を題して賈誼に報いん
 地濕似長沙 地濕にして長沙に似たり

そこに附された『全唐詩典故辞典』（上巻、299頁）のコメントは「作者当時貶官樂城、此詩作於樂城隣県永嘉。這裏以賈誼指袁瓘、并表示与袁氏同病相憐」といい、ここでも、賈誼を他者（袁瓘）に対して用いている。

その一方で、詩の作者自身の比喩として用いられることもある。たとえば、以下のものがある。

張説「巴丘春作」
 ……
 鳥戸巢為館 鳥戸 巢もて館と為し
 漁人艇作家 漁人 艇もて家と作す
 自憐心問景 自ら憐む 心に景に問うを
 三歳客長沙 三歳 長沙に客たり

この箇所には『全唐詩典故辞典』では「作者当時貶居岳州、這裏以遭貶的賈誼自比」とコメントする。長沙に居住することが三年となり、賈誼同様、中央官界に復帰することが近づいてきたことを期待する表現として読み取ることもできよう。

この「長沙謫」という典故は、このように自分に対しても他人に対しても用いるが、用例の数から言って、他者が中央へ復帰することを暗示する「縁起」のいい典故と言えよう。

では次に、「長沙謫」と同じく23例が引用される「鵬鳥賦」（他にも「鵬鳥入」などの表現を含む）という典故について検証しよう。「鵬鳥賦」の序には以下のように言う。

誼為長沙王傅、三年、有鵬鳥飛入誼舍。止於坐隅、鵬似鴉、不祥鳥也。誼既以謫居長沙、長沙卑濕、誼自傷悼、以為壽不得長、迺為賦以自廣。

ここから、貶謫に遭うことの比喩として「鵬鳥賦」が典故として用いられるようになった。

この23例がどのように用いられているかを『全唐詩典故辞典』にしたがって検証したところ、自分に対して用いた例が5例、他者に対して用いた例が15例、その他が2例となっている。自分に対して用いた具体例を挙げよう。張署「贈韓退之」という作品がある。頸聯を引く。

鮫人遠泛漁舟水 鮫人遠く泛かぶ 漁舟の水
 鵬鳥間飛露裏天 鵬鳥間に飛ぶ 露裏の天^(注15)

作者の張署は『全唐詩』巻三一四に附された伝によれば、臨武令に貶されたことがある。臨武は現在の湖南省にあった。この経歴とこの作品との関連はわからないが、作者が南方の風景

を詠んでいることは間違いない。そして「鵬鳥閑飛露裏天」の句によって、南方の地で作者が不本意なまま過ごしていることがうかがえよう。

それとは別に、他者に対して用いた例を挙げよう。たとえば、許渾の「贈蕭兵曹先輩」の頷聯では以下のように詠う。

楚客病時無鵬鳥　　楚客病みし時　　鵬鳥無
く
越郷歸處有鱸魚　　越郷歸りし處　　鱸魚有
り

ここでは、蕭兵曹が楚の地で病臥したけれども縁起の悪い鵬鳥は来ず、健康に戻ったことを詠じる。

もちろん、死を予感させる故事なので、すでに死去した人に対して持ちいる例が8例あり、必ずしも生きている人に対してのみ使ったわけではない。その使用には慎重さが要求されたのかもしれない。一例を挙げると、杜甫「哭韋大夫之晉」がそれである。

鵬鳥長沙諱　　鵬鳥　長沙に諱み
犀牛蜀郡憐　　犀牛　蜀郡に憐む

ここでは、賈誼は死を予感して「鵬鳥賦」を詠じるが、その長沙の地で韋之晉が死去したことを杜甫は詠じる。

では次に、「洛陽才子」（他にも、「洛陽才・洛陽人・洛陽子・才子・洛陽少年」の表現を含む）という典故を見てみよう。「洛陽才子」という表現は、『漢書』『賈誼伝』などではなく、後世の晋・潘岳「西征賦」の「終童山東之英妙、賈生洛陽之才子」に由来するものである。『全唐詩典故辞典』では、あわせて19例を挙げる。そこには、以下のようにコメントする。

①這裏以賈誼自比、自嘆懷才不遇。（陳子昂「酬田逸人遊巖見尋不遇題隱居里壁」）

②這裏詠賈誼被逐、望月思君。（李如璧「明月」）

③這裏以賈誼比崔氏。（王維「同崔傅答賢弟」）

④這裏以賈誼比孫二。（王維「送孫二」）

⑤作者為洛陽人、這裏活用賈誼事以自謙。（祖詠「酬汴州李別駕贈」）

⑥這裏以賈誼貶謫比袁三遭貶。（儲光羲「貽袁三拾遺謫作」）

⑦這裏借同姓相切、以賈誼比賈主簿。（孟浩然「和賈主簿弁九日登岷山」）

⑧袁拾遺居洛中、這裏以賈誼相比。（孟浩然「洛中訪袁拾遺不遇」）

⑨韓巽為洛陽人、這裏用「洛陽才子」加以稱美。（岑參「送韓巽入都觀省便赴舉」）

⑩這裏借以稱美李起居年少多才。（薛奇童「和李起居秋夜之作」）

⑪這裏暗以賈誼比張舍人。（李嘉祐「和張舍人中書宿直」）

⑫這裏以洛陽才子稱閻伯均。（包何「同閻伯均宿道士觀有述」）

⑬這裏以受排斥的賈誼自比、意含幽憤。（高適「古歌行」）

⑭這裏以賈誼比喻賈明府。（戎昱「九日賈明府見訪」）

⑮這裏表示追懷賈誼。（戴叔倫「過賈誼宅」）

⑯這裏以遭貶的賈誼自比。（羊士諤「資中早春」）

⑰這裏以「洛陽才子」喻指劉・白二氏。（令狐楚「皇城中心花園譏劉白賞春不及」）

⑱這裏以賈誼喻指崔純亮。（孟郊「寄崔純亮」）

⑲這裏以賈誼比擬李氏。（杜牧「早春寄岳州李使君李善棊愛酒情地閒雅」）

19例のうち、自分自身のたとえとして用いた例が3例、他者に対して用いた例が14例である。「才子」という表現が自分自身に用いることを難しくしているのだろうが、他者に対して積極的に用いている点は見逃せない。

次に、「宣室」を見てみよう。この「宣室」は『漢書』（卷四八）「賈誼伝」に「後歳餘、文帝思誼、徵之。至、入見、上方受釐、坐宣室」とあるものに基づく。この「宣室」について、三国・魏

の蘇林が注を付けて「宣室、未央前正室也」とする。文帝がここに賈誼を呼んだことから、「宣室」は君主が賢才を呼び寄せる際の典故として用いられるようになった。

『全唐詩典故辭典』では17例の作品が掲載されている。そのうち、単に宮殿などの意味で用いられた3例を除くと、12例が他者に対して用いられている。そして、自分自身に対して用いた2例も、それが果たせないという否定的な意味で用いられている。後述の「前席」と同じく、他者の栄達を祝う文脈で用いられる傾向が強い典故であると言えよう。そして、少数ながら自分に対して用いることはあるものの、それを正面から自分にあてはめることはせず、そういう栄達に与る機会がないという否定的な文脈で用いられていることがわかる。自分に対して用いることは慎重にならざるを得ない、そして、他者には使いやすい典故と言えよう。

次に14例を数える「弔屈原」（他にも、「弔長沙・弔靈均・弔屈・弔沈湘」を含む）を見てみよう。『史記』（卷八四）「賈生列伝」に、「於是天子後亦疏之、不用其議、乃以賈生為長沙王太傅。賈生既辭往行、聞長沙卑濕、自以壽不得長、又以適去、意不自得。及度湘水、為賦以弔屈原」とあり、そこから典故となって左遷されたことを歎く意味として広く用いられている。『全唐詩典故辭典』では、以下のコメントがある。

- ①這裏是將王六比作賈誼。（張九齡「酬王六霽後書懷見示」）
- ②這裏是由登臺追懷薛公（道衡）而聯想到賈誼弔屈原。（張九齡「陪王司馬登薛公遺臺」）
- ③杜審言被貶往吉州、這裏將杜審言比作賈誼。（宋之問「送杜審言」）
- ④這裏以遭貶的賈誼自比、自歎身世坎坷。（儲光義「奉酬張五丈垂贈」）
- ⑤這裏暗以賈誼比擬李侍御、對他貶郴州表示同情。（劉長卿「送李侍御貶郴州」）
- ⑥以賈誼為喻、對「從弟」貶往江南表示同情。（劉長卿「送從弟貶袁州」）

- ⑦這裏用賈誼事、借以寄托失意不平之感。（劉長卿「同姜濬題裴式微餘干東齋」）
- ⑧這裏借本典自述遊踪。（孟浩然「經七里灘」）
- ⑨作者因南山接近長沙、聯想到賈誼、這裏用賈誼事、借以寄托失意之感。（孟浩然「曉入南山」）
- ⑩這裏以遭貶而弔屈原的賈誼自比、抒寫遷謫情懷。（李白「贈崔秋浦 三首」其三）
- ⑪這裏暗以賈誼自比、自述失意不平之感。（李白「贈漢陽輔錄事 二首」其一）
- ⑫五溪在今湖南省。這裏用賈誼事以切張瑤貶五溪、對他表示同情。（高適「送張瑤貶五谿尉」）
- ⑬詩言瑤琴上演奏的「沈湘曲」傳達了賈誼悲悼屈原的感情。（雍裕之「聽彈沈湘」）
- ⑭作者因被遷謫者要路經屈原自沈之處、設想他會產生共鳴、作詩賦弔屈原。（羅隱「郴江遷客」）

以上の用例から、他者に対して賈誼を用いた例が6例、自分に対して用いた例が5例あり、その数は拮抗している。この典故を使用するにあたって、特に支障があったわけではないようである。

次に、「前席」の典故を見てみよう。これは、『漢書』（卷四八）「賈誼伝」にある以下の箇所由来する。

後歲餘、文帝思誼、徵之。至、入見、上方受釐、坐宣室。上因感鬼神事、而問鬼神之本。誼具道所以然之故。至夜半、文帝前席。

この箇所には顔師古の注があり、「漸促近誼、聽說其言也」という。近づいて人の話を積極的に聞くことをいう。『全唐詩典故辭典』（下巻、1294頁）に引かれた10例のコメントを見てみよう。

- ①這裏說柳相公受到皇帝禮遇。（包佶「奉和柳相公中書言懷」）
- ②這裏說李氏曾受到皇帝禮遇。（高適「奉酬睢陽李太守」）
- ③這裏以「前席」表示將再受到皇帝的召見。（杜

- 甫「送從弟亞赴安西判官」
 ④這裏以「前席」喻指李氏之父受到皇帝的禮遇。
 (杜甫「送李校書二十六韻」)
 ⑤這裏引賈誼受召見事、暗寓不遇之感。(杜甫「春日江村五首」其五)
 ⑥這裏以「前席」喻指李侍御受到皇帝寵遇。(錢起「喜李侍御拜郎官入省」)
 ⑦這裏說蔣尚書受到皇帝的任命。(錢起「送蔣尚書居守東都」)
 ⑧這裏說劉員外受到皇帝寵遇。(章八元「酬劉員外月下見寄」)
 ⑨這裏以「前席」表現皇帝對張僕射的接見。(權德輿「奉和張僕射朝天行」)
 ⑩這裏用「前席」典、表現所詠僧人昔日曾在宮中受到過皇帝的禮遇。(韓偓「贈僧」)

これらのコメントを見てみると、10例中9例が他者に対してこの「前席」を用いていることがわかる。賈誼の典故のなかでも他者の厚遇を喜ぶ際の典故として際立って多く用いられている。しかも、自分に対して用いた例では、「それができない」という否定的な意味で用いられている。自分ではなく、他者の栄達に用いられやすい典故であることがわかる。

このように見てくると、『全唐詩典故辞典』で10首以上の用例を挙げた賈誼ゆかりの典故のうち、文学作品の内容と直接関わる典故は「鵬鳥賦」のみと言えよう。他は賈誼の人生と強く結びついたものであると言ってよい。また、9首以下の用例の典故のうち、賈誼の人生と関係がないものは、「五餌」(3例)、「馮敬」(1例)、「投鼠」(2例)、「呉公守」(3例)、「墮履」(1例)、「叔敖陰德」(2例)を挙げられるに過ぎない。これらをすべて合わせると12例であり、『全唐詩典故辞典』に収められた賈誼の用例240例の5%にすぎないことがわかる。つまり、言い換えれば、賈誼はその文学作品が広く受け入れられて後世に伝えられたわけではなく、その人生が後世の文人たちの共感するところとなって、唐詩

のなかに詠いこまれていったことが確認できよう。

これらのことをまとめると、賈誼の典故については、以下のように言うことができるだろう。

賈誼に関する典故のうち、『全唐詩』に見られるものは、『全唐詩典故辞典』によれば34項目で、引用される唐詩は240首である。屈原と比較すると、項目数では29%程度であるが、『全唐詩典故辞典』に収録された引用例は屈原と比較して60%程度である。相対的に言えば、少ない項目が多くの作品に用いられたことになる。そしてその典故は、賈誼の文学作品の中から生まれたものは少なく、その人生に関わるものが多数を占めている。賈誼の人物像は、文学によってではなく、主として、その人生、言い換えれば、賈誼がどう生きたかという点によって後世に伝えられたと言えよう。

5 結び

ともすれば類似する人物像をあてがわれやすい屈原と賈誼について、それぞれに関わる典故を手がかりにして、考察してきた。そこから確認できたことは、屈原がその作品を含めてさまざまな側面によって形成されているのに対し、賈誼はその人生や事跡の側面を中心に人物像が形成されているという点である。また、屈原はそのまま適地で死んだために、やや「縁起」が悪く、その知名度のわりに典故としては用いられなかったようである。とりわけ、他者に対して用いる場面では、屈原の典故の印象は薄い。この点では、長安に帰ることが出来た賈誼の典故がより活用されている。これは単に典故となりやすい傾向を持つか否かとは別の、詩の中に用いられやすいか否かという問題も絡み、興味深い現象となっている。文人の生涯が典故として用いられる際には、単に有名であるというだけでなく、その人物がその後どうなったかという側面も重要なポイントとなると言えよう。

では、本稿で知り得たことを今後、どのよう

に活かしていけばいいのであろうか。

一つは、屈原の詩跡である。今、『中国詩跡事典』を見ると、屈原ゆかりの詩跡に、「屈原祠」「汨羅江」「屈原廟」「湘江」「沅江」がある。このうちの「屈原祠」「屈原廟」は複数存在する。「屈原を祭る廟祠は、湖北・湖南両省を中心に散在する」^(注16)とされ、後世の人々がその死を悼んで各地で作られたものであり、屈原の特定の事跡とは関わりなく作られたものであろう。^(注17)

一方、『中国詩跡事典』に見える賈誼ゆかりの詩跡は「長沙」「賈誼宅」である。いずれも賈誼の事跡と直接の関わりがある。^(注18)後世の人々によって複数作られたものではない。

こう見てみると、詩跡の形成のあり方も、文人の生涯によって、大きく分かれていることが知られる。詩人のどの要素が典故として伝えられていくか、という点が、詩跡の形成のあり方も大きく関わっていると言えよう。賈誼のように特定の事跡に即して詩跡が形成されるものもあれば、屈原のように、後世の人々から追慕されて、特定の事跡とは無関係に複数作られるものもあるのである。この問題については、稿を改めて論じたい。

【注】

(注1) 「詩跡」とは植木久行編著『中国詩跡事典』(研文出版、2015年、p.4)「詩跡概説」(二、詩跡－風土からの発想－)では以下のように説明される。「詩跡とは、長い文学の伝統をもつ中国のなかで、最高の文芸様式－詩歌によって生み出された、重要な文学空間を表す術語である。それは、単なる地名ではなく、長い間詠みつがれ、愛唱・流布される詩歌を通して著名になって、ある特定の詩情やイメージを豊かにたたえる、各地の具体的な名所(名どころ)をいう。詩跡は、単なる「名勝」(山水自然の美で有名な土地)や「古跡」(歴史上有名な場所、歴史的な人物や事件に関わる

土地)とは本質的に異なる、詩歌を主体とした概念である。歴代の詩人たちに詠みつがれて、次々と新しい変奏を積み重ね、詩歌の創造に点火して、表現の核となる力をたたえた地名(明確な古典詩語)が、「詩跡」なのである。」

(注2) 貶謫と文学に関わる屈原の位置づけに関して、「屈原是中国歴史早期最重要の一箇貶謫詩人、也是執着意識最突出的代表」(尚永亮『貶謫文化与貶謫文学』(蘭州大学出版社、2004年、p.228))という意見があり、屈原が貶謫詩人の重要な代表の人物であったことがわかる。

(注3) 貶謫と文学に関わる賈誼の位置づけに関して、「屈原之後、身經棄逐而又作為詩文抒發哀怨的第二大貶謫詩人便是賈誼、在貶謫文化史上、賈誼自有他不同於屈原的独特意義」(注2所掲尚永亮書p.234)という意見がある。屈原とともに、賈誼も貶謫文人の代表的存在であった。

(注4) 屈原と賈誼が結びつけられて後世に伝えられたことに関して、以下の意見がある。「屈原和賈誼、可以作為不同時代内心正直而慘遭不幸的知識分子的代表、具有精神繼承關係。從此“屈・賈”併稱、成為文学史上不平之鳴的代表、特別是這種不平、突出地表現在政治失意的憤激与悲哀之中。屈・賈併稱、是漫長時空中、人們对屈原和賈誼精神的一致性的認同」という。(『杜甫与地域文化』(葛景春ほか、社会科学文献出版社、2016年、pp.463-464、隋秀玲執筆))

(注5) 「靈均」は屈原の字である。

(注6) この問題に関しては、尚永亮「忠奸之争与感士不遇——論屈原賈誼的意識傾向及其在貶謫文化史上的模式意義」(『社会科学戦線』1997年4期)(のち、注2所掲の尚永亮『貶謫文化与貶謫文学』(蘭州大学出版社、2004年)に収録)、江立中「悼念屈原文学作品的濫觴之作」

(欽州師範高等専科学報第 17 卷第 1 期、2002 年 3 月)、程建「唐代詠賈誼詩与湘楚地域的文化関聯」(長春工業大学学報(社会科学版)第 21 卷、第 5 期、2009 年 9 月)などがあるが、概ね、簡単な記述にとどまっている。本稿は、具体的な典故に即して、唐詩の中でどのように受け継がれてきたかを調査しており、その点で、意義がある。

(注 7)『漢詩の事典』松浦友久編著、1999 年、大修館書店、p.730。当該箇所は松原朗執筆。

(注 8)『全唐詩典故辞典』(上巻、p.876)では、「這裏活用《漁父》篇意、以屈原貶謫比擬畢侍御謫居、並以滄浪水清比擬畢侍御之清白」と指摘する。

(注 9)『全唐詩典故辞典』(上巻、p.876)では、「這裏以漁父自況、自嘆漂零」という。

(注 10)「「濯纓」の解釈にみる詩的印象の形成——詩語と詩人像の受容のありかたをめぐって——」(許山秀樹、『中国詩文論叢』、第三十四集、2015 年)

(注 11)『中国典故辞典』(漢語大詞典編纂所、上海辞書出版社、2012 年)を見て、屈原の見出しで検索すると、「屈原沈湘」の大項目があり(p.647)、類似する典故表現として「沈湘・楚臣悲・楚累・歌楚弔湘累・懷沙負石・屈平沈湘・屈原沈・屈原沈湘・屈子沈湘・投汨・投累・湘累怨」の 12 項が掲載されているに過ぎないが、賈誼の見出しで検索すると、大項目として「賈生賦鵬」(p.351)と「賈生涕」(p.352)の二つが立ち、それぞれ、24 と 6 の小項目が立っており、屈原の倍以上の小項目があることになる。屈原よりも賈誼の典故の方がより広がりをもってさまざまに使われたと言えよう。

(注 12)注 6 所掲、程建「唐代詠賈誼詩与湘楚地域的文化関聯」には、「对唐代文人而言、無論是從生活的時代背景、還是從

面臨的人生選擇上考慮、他們同賈誼間的距離都要比他們同屈原間的距離來得近些、這正是唐代詠賈誼詩勝過詠屈原詩的主要原因」という。

(注 13)「長沙謫」だけでなく、「長沙宦」「長沙湿」「長沙才子」「長沙傳」「長沙愁」「長沙客」などもこれに含まれる。

(注 14)『漢書』(卷四十八)の「適去」に顔師古が注を付け、「適音謫、其下亦同」というのに従い、「謫居」の意味で解釈される。なお、『漢書全訳』(劉華清ほか訳、貴州人民出版社、1995 年)では「其曰適去者、以其去天子之側而官王国也。」(p.3637)というが、『漢書新注』(施丁主編、三秦出版社、1994 年)では、「謫居」を「遭貶居住」と解釈する。(p.2213)

(注 15)文字に異同があり、『五百家注昌黎文集』巻九などでは「漁舟火」「霧裏天」に作る。

(注 16)『中国詩跡事典』p.426、矢田博士執筆。

(注 17)この点、拙稿「地理書に見える二つの虞姬墓と詩跡化」(『中国詩文論叢』、第 35 集、2016 年)と類似する事情を持つ。

(注 18)『賈誼評伝』(王興国、南京大学出版社、1992 年、p.311)に拠れば、「對於賈誼其人、他的故宅和賈太傅祠、古往今來詠懷・瞻仰和凭弔者不絕；無数遷客騷人写下了大量的詩歌、文章或對聯、僅《長沙賈太傅祠志》中所錄者就有兩百多首。就作者之時代來說、上起魏・唐、下迄晚清。就內容來說、有詠其人、詠其宅者、也有詠其祠中一物一景者。」といい、その文学に対する後人の評価はそれほど高くないことがわかる。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 JP15K02434 の助成を受けたものである。研究課題名は、「中国江南地方の地方志の文学資料分析—史的遺産と詩跡的遺産の側面から—」(基盤(C)一般)(2015-2017 年度)である。